日本語字幕版 DVD 制作：2006 年 9 月
発行日 2006 年 9 月

DVD購入方法
一般価格　3,500 円
ライブラリー価格　20,000 円
申し込み先

〒162-0045　新宿区馬場下町 18　フェニックスビル 3 階 PA/F Space 内
LaLa Cultures（ララ・カルチャーズ）
Tel&Fax 03-3200-2393
HP: http://d-mov.jpn.org　　mail: d-mail@d-mov.jpn.org

the book of

LET'S LOVE 香港

DIRECTOR'S INTERVIEW

『レッツ・ラブ・香港』映画情報

［内容］
電脳世界のAV女優チャン、彼女に恋するその日暮らしのゼロ、金も力も手に入れた女社長のニコール。３人の女はまったく異なる現実を生きながら、孤独という一点でつながっている。求めても得られない。持っていても満たされない。そして現実世界の中では自分の存在すら信じられない。情報と欲望に流される香港は、この国の現実にかさなる。深いテーマはしかし、虚実のはざまを漂いながら、ユーモラスに、詩情豊かに描かれていく。

［制作］ 2002年　香港　35mm　87mins
［監督・脚本］ ヤウ・チン(Yau Ching)
［配役］ ゼロ……エリカ・ラム(Erica　Lam)
チャン……ウォン・チャン・チン(Wong Chung-Ching)
ニコール……コレット・クー(Colette Koo)
ママ……マリア・コルデロ(Maria Cordero)
娼婦……ウェラ・チェン(Wella Cheng)

［ヤウ・チン監督紹介］
1966年香港生まれ。香港の大学では比較文学と哲学を専攻。後にニューヨークとロンドンで映画制作とメディア芸術を学ぶ。ニューヨーク・ホイットニー独立研究プログラム終了後、映画監督、マルチメディア・インスタレーション・アーティスト、作家、教育者として活躍。現在は台湾の大学で教えている。

2005年夏に台湾の第１回アジア・レズビアン映画祭、11月の香港ゲイ＆レズビアン映画祭にも参加。「レッツ・ラブ・香港」は国際映画祭でポルトガル国際批評家賞・フィクション部門１位を受賞している。

これまで作った映画・ビデオ作品には『何を言ってほしいのよ？』(90)、『流れ』(93)、『理想の国の物語』(93)、『ビデオレター1-3』(93)、『離散・死んだ空気』(93)、『1997年6月30日(いったい何を祝うっていうの？)』(97)、『私は飢えている』(99)、『スエ・シンの姉妹たち』(99)がある。

ヤウ・チン監督へのインタヴュー

Q0　最初にご自身のカムアウト・ストーリーとお母さんについて話していただけますか？

A0　10代のころカトリック系の女子校に通い、15歳のとき、クラスメートの女の子に恋をしました。当時わたしは「レズビアン」という言葉さえ理解していなかったし、その人とわたしは他の人と同じくらい普通だと考えていました。でもわたしたちの関係はそばで見てよく分かったようで、学校の先生が母に伝えました。先生はこのことをわたしに内緒にしておくように言いました。

わたしの母は映画の中の母親役によく似ていて、現代的な人ではありません。英語は分からないし、中国大陸の地方出身で、読み書きもあまりできません。だから学校で教師からわたしのことを言われても、何のことか全然理解できませんでした。母が姉と父にこの話をすると、姉の反応は「じゃあ、妹はレズビアンということなの？」でした。わたしが生まれ育った家は、チャンが住んでいたアパートとまったく同じで、一部屋しかありません。トイレはテラスの外にあり、わたしがシャワーから出たときに姉がそう言ったのを耳にしたのです。でもわたしにはほとんど関係ないことだと思っていました。「レズビアン」が恥ずかしいという意味で使われていたし、それはわたし自身が感じていた深い愛、すばらしい経験とは全然違いましたから。わたし自身の感情と他人がわたしをどう思うかということにはギャップがあると、そのとき初めて知りました。その経験はトラウマになっています。姉は覚えていますが、母はまったく覚えていません。

その15歳のときから、家族には何度も何度もカムアウトしています。そうしないと忘れられてしまいますからね。今、母と姉はカリフォルニアに住んでいます。この映画はサンフランシスコのゲイ＆レズビアン映画祭で上映されました。わたしがＴＶのインタヴューを受けた番組が放映され、家族が偶然それを目にしました。姉は驚いて、下を向いたまま黙って食事を続け、兄は部屋を飛び出しましたが、母はそのままずっとＴＶを見つづけました。インタヴューが終わったとき、母は「あの子はなぜあんなジャケットを着ているの？　他にもっといい服を持っていないの？」と姉に聞いたそうです(笑)。

Q1　どういう動機でこの映画を作ったのですか？

A1　動機は二つありました。ひとつは、香港には大きな映画産業はあるけれど、レズビアンが登場するものは少なく、普通とても否定的です。そこで、納得のいく現実的なレズビアンを描きたかったこと。

もうひとつの動機は、わたしは1990年に香港を出て、1999年に帰ってきたんですけど、その間の社会の変化が気になったことです。それは社会の問題として、わたしの周りにいるレズビアンたちの生活に広がり反映していました。わたしは自分の知っているレズビアンたちと社会の問題、この二つをからめた映画を作りたかったのです。

Q2　香港での反応はどうでしたか？

A2　この映画のビデオ版は2002年に完成し、香港のインターナショナル映画祭で上映されました。その映画祭に招待された外国の人たちが映画について文章を書いてくれました。でも、香港では何の反応もなかったんです。2、3ヶ月後、台湾で上映されてから、台湾のゴールデン・ホース映画祭(映画業界で権威がある)のコンテストに招待され出品したところ、ゼロを演じた俳優がベスト新人女優賞に推薦されました。彼女にとっては初めての映画出演だったので、とても驚いていました。

わたしたちは香港の外で注目を集めました。ヨーロッパにもアメリカにも呼ばれて行きました。でも、香港では誰も話題にしませんでした。約1年後の2003年に、わたしは香港の人たちにもっと見てほしかったので、大きな借金をし、自分のお金も全部つぎ込んで、この映画を35mmフィルムに変換しました。そして、上映してもらうために香港中の映画館に電話をかけました。当時、香港の映画館は35mmフィルムしか上映しなかったのです。電話をかけまくって、やっと2週間上映してもらうことになりました。チケットの売れ行きはまあまあでした。これは商業映画ではなかったし、映画館はとても小さいところでした。

その後、香港のDVD制作会社がこの映画のDVD化の話を持ってきました。DVD制作会社は、映画がすでに映画館で上映されていないかぎり取り上げてくれません。まず映画館で上映してから、DVD制作会社へ売ることができました。この映画は、映画祭でも映画館でも上映されたけれど、検閲の問題がありました。日本でも映画のランクづけってあると思うけれど、18歳以下が見られる映画と、18歳以下が見られない“X”格づけの映画とがあって、この映画は“X”格づけがされていたんです。きびしすぎると思いますけれどね。

Q3　タイトルはどういう意味ですか？

A3「好郁」（ホウ・ユック）は、広東語でバイブレーション、こんなふうに（手を左右にすばやく振って見せて）速く動くもの、揺れるもののことです。香港はとてもペースの速い街。人も車もすばやく動く。もしあなたがゆっくり歩いていたら、「もっと急げ！」と背中を押されてしまうでしょう。

「好」という字を分解すると「おんな」になります。だから「好郁」は揺れているという意味でもあり、女が揺れているという意味でもある。女が揺れているってことは、マスターベーションしているという意味もにもなります。

Q4　社会状況と登場人物のキャラクターにはどういう関係がありますか？

A4　香港の社会状況について、私はいくつか主要なテーマを話したいと思います。ひとつは住宅事情。香港の人びとはとても小さな部屋に住んでいます。もうひとつはコミュニケーションが困難だということです。多くの人々がテクノロジーに頼っているけれど、それがいつも助けになるわけではない。テクノロジーは新しい可能性も開いてくれますが、限界があります。

例えばニコールの場合。彼女は毎晩、好きなときに画面上のチャンにコミュニケートできます。何をしているか、誰にも知られることもなく。自分をさらけ出すこともなく。隔離されて孤独で…。いや、すみません、孤独ではないですね。完全にプライベートな経験です。でも誰かにつながっていたいと感じて、その欲望を実行している。コミュニケーションの難しさは、階級（問題）も関係しますが、人の持つ「親密になることへの恐怖」も関係しています。私の知っている多くの人が不安（恐怖？）をもっています。とりわけ香港のような社会では。その不安は人々がつながりあうことを難しくしている。私は色んな人から何回も、チャンのゼロへの対応がもっとポジティブだったらいいのにと言

われました。でも考えてみてほしいんです。チャンにとって、娼婦といるときは、自分で状況をコントロールできるから安全なのですが、ゼロとの場合は危険です。チャンはゼロが何者かわからない。その場をコントロールできることで、チャンは人との関係から距離をとることができる。「親密になること」と「恐怖」、「距離」といったことを考えたいと思ったのです。

Q5　香港のレズビアンの経済状況は？

A5　一般化できませんね。誰もが同じというわけではないから。金持ちのレズビアンもいるし、中産階級のレズビアンも大勢いる。やっと生活できる感じの人々や、貧しくて生きるのに必死な若いレズビアンも香港にはたくさんいます。

私はいつも自分の人生をふり返って思うんです。私は39才。大学の教授で安定した収入がある。もし私が大学に行かなかったら、19才で高校を中退したかもしれない。学校を止めて、何も知らず、仕事もなく、生活できなかったかもしれない。ゼロのようだったかもしれない。若いとき、私も映画の中のゼロみたいに色んなことをしました。また私は高校で…… 問題があり……生きのびられるのかどうかわかりませんでした。

私が初めてゼロに会ったとき、彼女は道端で携帯電話を売っていました。私たちは話をしてすぐ簡単に友達になりました。彼女が話してくれた多くの問題には私も若いときに直面したことがありました。私は経済的に安定したので、今はそれらの問題を解決できる。でも、彼女にはできない。

この映画を作った理由の１つは、香港のいろんな違う種類のレズビアンを見せたかったことです。ニコールのような、また何の手だても持たないゼロのような人たちを。

Q6　香港にはレズビアン相手の売春婦がいますか？

A6　はい、います。私の知っている売春婦、セックス・ワーカーたちはレズビアンに興味を持っています。香港の問題は、（マフィアが介在しているので）売春婦に出会うことがむずかしいことです。香港の売春婦たちはマフィア・地下組織にコントロールされているため、彼女たちと会うには、ミドルマン（仲介の男たち）を通さなければならない。レズビアンにとって、問題の鍵はどうやって直接、売春婦たちに出会うかということです。時々、広告をだしていることがあり、私の友人の中にも、セックスのために直接売春婦を買うレズビアンが何人かいます。日本もそうだと思うけど、レズビアンが他のレズビアンに出会うことはすごくむずかしいから。とりわけ年配のレズビアンにとってはね。

Q7　香港ではシアターに住んでいる人々が実際にいるのですか？

A7　いえ、いません。香港はシュールリアリステックな要素を持つ街です。私は、何かとてもリアリスティックな、ほとんどコミックのようなものと、何かすごくファンタジーのようなものをいっしょにしたいと考えました。何かとてもシュールな。キリンが歩いているような。この古い映画館のような。映画館に住むというシーンは、映画を違うレベルのリアリティにもっていくために作ったのです。ファンタジーや欲望を、目の前の現実として描くのではなく、超現実の世界で描きたかった。また、観る人たちにこの違うレベルのリアリティから、今の現実を振り返って見てほしかったんです。

放置されたままの映画館がたくさんあります。ただ小さい映画館だけが生き延びている。目を見張るような、多くの美しい建物がもう機能していません。そこで私は、もし香港の住宅事情や貧困がますますひどくなったら、この大勢の貧しい人たちはホームレスになり、映画館に住むのではないかと考えたのです。この人たちがひとつのコミュニティになる状況って、面白いかもしれない。

Q8　チャンが母親と大根餅を作っているシーンには何か意味がありますか？

A8　私にとって母親というものは料理を通して感じるものでした。育った過程で、そうやって母親につながっていたのです。母はいつも料理を通して愛情を表わしていました。彼女は私たちを台所に入れませんでした。台所にいる女は、教育があるとは思われなかったし、ハイクラスとも思われなかったから、彼女自身がすべての料理をしなければならなかった。それが母の愛情表現でした。

チャンと母親のやりとり、彼女がドアに寄りかかって母親としゃべっているシーンは、私が育っていく過程の記憶からきたものです。私が母と会話したのは、ほとんど彼女が料理している時でした。もちろん、私は大人になってから、母がこういうことをしながらたくさんの欲求不満を持っていたと知りました。

あのシーンは親密さを表しています。お互い感情的に、身体的に結びついています。それとは別に、母親がチャンを叱っているように見える－ちゃんと食べているの？どうして元気がないの？ －と怒っているようですが、それは典型的な香港広東人のやり方で、子供をはねつけることで両親は愛情を示すのです。彼女は怒っているように見えますが、実は愛情を表しています。そのことを理解するのに20年以上かかりました。

Q9　映画の中の３人のなかで、あなたは誰に一番近いと思いますか？

A9（しばらく考えた後）３人全員ですね。若いとき、私はちょうどゼロのようでした。ゼロのフィーリングや体験の多くが、10代のころの自分となじみ深いものです。その後、私はだんだんチャン・コク・チャンのようになっていきました。彼女の人間関係、例えば彼女の母親との関係のような…。

ニコールはむずかしい。香港に帰ってきてからこの５年くらい、つい最近まで、私はあんなふうに感じていました。私は自分の家を持っている。私は前のように、もうそれほど生活の心配をしなくてもよくなった。でも、たくさんのことが…（長く考えてから）人とつながりあうことができない。コミュニケートするには、たくさんの困難がある。人と分かり合うことのむずかしさ。孤独。人生のなかで囚われている。まるで牢獄に入れられているような。どこにも行くところがなくて。それがどんどん強くなる。私は、人生のあるポイントに達しているような感じがします。やりたいと思っていたことはやったけど、ここからどこへ行ったらいいのかわからない。私は（人が…する）いろんなことをしたけれど、それに意味があったのか？　私にとってニコールはそんなキャラクターです。私は、彼女がよりどころとしているものにも、それが何なのかと疑問を投げかけています。

Q10　アジアのレズビアンの状況を知っていますか？

A10　私は他のアジアの国々を知りたいし、他のアジアの仲間と組んで何かがしたい。アメリカやヨーロッパに住み、そしてアジアに帰ってきて、欧米では不可能なものをアジアにたくさん見出しました。すごいエネルギー、多くの人間、多様性。また、長い間植民地とされ、置き去りにされてきたアジアには複雑な文化がありますから。今のアジアの状況はとてもエキサイティングです。たくさんのものが混ざり合っている。多くの可能性がある。これらはニューヨークやアメリカでは見られません。アジアについて多くのことを知って、何が正しいとは言い難くなりました。それぞれの文化はすごく違っています。自分の目で見て知る必要があります。私は今アジアのレズビアンについて知り始めました。１つの社会を越えて、香港から出て、台湾のレズビアンたちといっしょに、アジアについてのイベントを他のアジアのコミュニティと作り始めました。そのことから私は学んでいます。アジアのレズビアンたちが大勢同じ体験や感覚をシェアしています。それは、私たちの歴史でもあるし、文化でもある。私たちがどこから来たかとかというルーツの問題でもある。こんなに違っていて、しかも、こんなにも似ているのって、おもしろい。いつも私を驚かせるのは、あることがこんなに似ているのに、あることがまるっきり違っているということです。このように相反することが、私の興味をそそるのです。

Q11　この映画の続編はありますか？

A11　誰かが作ってくれたらいいなと思っています。チャンとゼロを演じた女性たちは私の友人です。私たちはよく会いますから、時々、彼女たちのために何か書けないかと考えることもあります。今のところ私は、あの映画でもう言うことはありません。もう終わったのです。ただ、チャンのキャラクターはもう少し深めてみたい。彼女には可能性があるから。でもそれはゼロとの共演ということではなく、チャンだけのストーリーか、ゼロだけのストーリーかです。私はチャンとゼロをいっしょには組むことはもう考えません。

Q12　新しい映画を作っていますか？

A12　ええ、いくつか次の作品に取り組んでいます。

ひとつは長編で、ゲイの少年が大人になる過程で、その子とトランスジェンダーのおばさんのことを描いたものです。原作は台湾の小説で、それを数年前に読んだときとても感動しました。少年は理由もなく台湾から日本に行かされ、日本の家族と生活をともにします。そこでおばさんだと思っていた人がおじさんであったことがわかる。私にとってこの話は、家族からの追放、ある場所か

らの追放の話として理解しました。自分自身が人と関係を築くことによって、家族というものを新たに築くことができるのだと。

この作品を作りたくて資金繰りを何年もがんばっているんですが、カムアウトしているために難しい。カムアウトしている監督は香港では私だけなんです。そのことはアート作品を作る上でとても重要だと思っています。でも、次回作を撮るために香港政府に資金の申請をしたところ、断られました。私は何本ものフィルムを作り、海外で賞を受けたこともあります。このような経歴を持つアーティストが資金の申請をすれば、金額は少なくても必ず提供されています。でも私は断わられました。

この作品以外にも、アジアの中で成長することがいかに難しいかを描いたドキュメンタリーを作っています。また最近では、いろんな映画祭にオーガナイザーとして関わり、台湾ではアジアレズビアン映画祭を創設しました。香港でのレズビアン&ゲイ映画祭ではキューレーターとして関わっています。ゲイ、特にレズビアンが作品をつくることと、その作品の上映に尽力しています。

（インタヴュー:「レッツ・ラブ・香港上映会LEZ」スタッフ
翻訳：麻川まりこ　構成：沢部ひとみ）

＊＊

日本語字幕版ＤＶＤ制作
協力：Sister Waves（波をつくる女たち）
日本語訳：渡辺文恵、他
広東語から日本語への翻訳監修：アンジェリーナ・チン
字幕スーパー入れ：麻川まりこ
表紙デザイン：広瀬麻弥
パンフレット制作：沢部ひとみ
LaLa Cultures（ララ・カルチャーズ）
『レッツ・ラブ香港』ＤＶＤ化のために出発したグループ。
スタッフは麻川まりこ、沢部ひとみ、広瀬麻弥（つな）。
連絡先:〒162-0045　新宿区馬場下町 18 フェニックスビル 3 階 PA/F Space 内
Tel&Fax 03-3200-2393
HP: http://d-mov.jpn.org　mail: d-mail@d-mov.jpn.org

『レッツ・ラブ・香港』ひとこと映画評

天宮沙江（マンガ家）

近くにいるのに触れ合うことのできない相手の体温を、距離を測りながら、感じとろうとする彼女たち。その温度がひとつひとつ届いてくる、ディテールまでいとおしい映画でした。

出雲まろう（ライター）

どうしてダイクは気難しい女の子に恋してしまうのだろう。お母さんのため、大きな家を買ってあげるために、バーチャル・セックスの仕事を続ける主人公チャン・コク・チャンの立ち姿が、とても切なくて印象的でした。

iri（自主映画監督）

ゼロが青いジャージを着て窓の外を眺めているスチール。一目惚れしたそのスチールで、私は「レッツ・ラブ・ホンコン」の存在を知った。やっと巡り会えたと興奮したものだ。

北原みのり（ラブピースクラブ代表）

「さみしい」という感情の行方を探しました。語られない物語を、見終わった後に自分で物語るような、そんな映画です。膝を抱えるような女たちのさみしさと、背筋を伸ばし歩く女たちのつよさは、なんで似ているんだろう。なんのこっちゃ、という方は映画、観てね。

土井ゆみ（映画ライター）

孤独と秘密と夢を持って香港に生きる３人の若いレスビアン。彼女たちは、新宿に、渋谷に、河原町に、梅田に、栄に、天神にも、いる。あなたの隣にいる。彼女たちをわかる必要はない。でも、感じることはできるはず。出会えない時代を生きるのは、みな同じなのだから。

浜野佐知（映画監督）

香港で、ハワイで、パリで、映画館のドアを開けて“ハーイ、サチさん！”といつも明るい笑顔で現れるヤウ・チン監督。「レッツ・ラブ・香港」のラストで、主人公の一人が首筋を隠すシーンが胸にせまった、と伝えたら、“あれは、私だ”とまっすぐな眼で私を見た。この映画を観る日本の女性たちは、ヤウ・チン監督の視線に、首筋を隠すのだろうか、それとも……？